

Goethe and Hinduism

Evelyn Zraggen

Goethe lived during a phase in which research on the *Mahābhārata* and the *Bhagavad Gita* had just begun in Germany. For that reason, translations, interpretations and a system of Hindu literature were not yet fully established. Goethe was observing the development of this newly born Indology and was trying to acquire knowledge about it. He also made use of Indian stories for his own poems like “The God and the Bayadere”, “The Pariah”, “Tame Xenia” etc. Goethe read the *Bhagavad Gita*, *The Journey to the World of Indra*, *Ramayana*, *Gita Govinda*, *Meghadūta*, plays such as *Shakuntala* and *Nala* and literature about Hindu society. Whereas he could not accept the caste system and the gods of Indian mythology, his poem “The Pariah” shows his view of reincarnation in Hinduism. Hindu concepts such as reincarnation and action show a similarity to his own view of life.

ゲーテとヒンズー教

ツグラッゲン・エヴェリン

はじめに

ゲーテが生きた時代は、東洋の知識が西洋へ運ばれ、ドイツにおいてインド学が学問として確立された時代であった。しかし確立されたばかりゆえに、ヒンズー教の体系、概念などはまだはっきりしなかった時代でもあった。ゲーテは世界のあらゆる文学に興味を持っており、インド文学にも魅力を感じた。

これまでの研究で、ゲーテは、インド文学とインド宗教の間に、大きな対立を見たことが明らかになっている¹⁾。後世彼のインド宗教に対する違和感について言及された記事もある²⁾。

現在のインド研究に基づいて、ゲーテのインドの詩文学やインド宗教などの理解と、彼のインドと関係がある作品について詳しく調べる必要がある。ゲーテとインド宗教についての研究では、彼の若い頃のインド宗教についての考えと、最晩年のそれとを比較する必要がある。

本論文では、ゲーテのヒンズー教（インド宗教と哲学）との関わりを中心に、彼がいつ、どのような文献を研究したかを年代順に詳しく調べ、彼のインド宗教についての考えが時間と共にどう変わったかについてみていきたい。

まずはヒンズー教諸文献の西洋への広がりを紹介し、次にゲーテとヒンズー教の文献との関わり、そしてゲーテのインド宗教についての考察について論じていく。

1. ヒンズー教、『マハーバーラタ』、『バガヴァッド・ギーター』の西洋への広がり

『マハーバーラタ』(*Mahabharata*)と『ラーマーヤナ』(*Ramayana*)は古代インドの二大民族叙事詩であり、ヒンズー教の聖典の一つとして数えられている³⁾。『バガヴァッド・ギーター』(*Bhagavad Gita*、「神の歌」、以下『ギーター』と略する)は、18章よりなり『マハーバーラタ』第6巻に編入されており、ヒンズー教が世界に誇る珠玉の聖典であり、古来より宗派を超えて愛誦されてきた⁴⁾。

インドの神話学者であるデフドゥット・パッタナイク (Devdutt Pattanaik, 1970-)は著作 *my GITA* (『私のギーター』、2015年)の中で1200年以上にわたる『ギーター』の広がりを5段階で説明している⁵⁾。第3段階にはサー・チャールズ・ウィルキンズ (Sir Charles Wilkins, 1749-1836)などのヨーロッパ人による翻訳が含まれていて、ゲーテはこの時代に生きていた。この段階の翻訳家たちは、総じてキリスト教徒であったということにパッタナイクは注目した。キリスト教徒はイスラム教徒と同じく、アブラハムの一神教の神話学(アブラハムの宗教)に由来し、神を知識の一次資源とみなし、人間を神の道に従うべき罪人とみなしている。このようなキリスト教的な見方で、『ギーター』を「ヒンズーの聖書」として捉えた⁶⁾。ゲーテと彼の同時代人もキリスト教徒であったので、彼らの『ギーター』理解、さらにインド宗教の理解もそうした見方に基づいたと思われる。

1. 2 ゲーテが生きていたヨーロッパでの梵学の始まり

ヨーロッパでの梵学(サンスクリット語に関する研究)はイギリスの研究者たちから始まった。これらの研究者には、言語学者であり翻訳家のサー・ウィリアム・ジョーンズ (Sir William Jones, 1746-1794)、東洋学者であり翻訳家のサー・チャールズ・ウィルキンズ、東洋学者のヘンリー・トーマス・コールブルック (Henry Thomas Colebrooke, 1765-1837)などがいた。この3人の研究者たちとゲーテはほぼ同時代に生きており、ゲーテは3人を知っていた。ジョーンズによる

『ギーター』の英訳は1785年に初めて出版された。

『西東詩集』(*West-östlicher Divan*, 1819) はゲーテがペルシャの詩人ハーフェズ(Hafis, 1315-1390)の詩から影響を受けて書いた詩集であるが、その『西東詩集 注解と論考 西東詩集のよりよき理解のために』(*Noten und Abhandlungen zu besserem Verständnis des West-östlichen Divans* 以下『注解と論考』と略する)の中で、インドについて言及している箇所がある。「教師、いまはなき、あるいは現在の」の章の中で、彼はジョーンズに感謝の意を表している⁷⁾。また「近世および最近の旅行家たち」の章の中で、インド研究の発展についての喜びを「ヘブライ語・ラビ語の限定された領域に発してサンスクリットの深さと広がりには達するため、精神と勤勉とが手をたずさえて歩んだ道程の長さを思いはかるなら、幾多の歳月ののちにこのような進歩の目撃者でありうることをよろこびとせざるをえない」⁸⁾と表している。インド研究に関してのこのような喜びや感謝をゲーテは他の箇所でも述べている。

1. 3 ゲーテが生活していたドイツでのインド研究の始まり

インド学研究者のヴィシュワ・アドルゥリ(Vishwa Adluri)とジョイディーブ・バグチー(Joydeep Bagchee)は、著書*The Nay Science — A History of German Indology* (2014)『ネイ学問 — ドイツのインド研究の歴史』の第1章「原叙事詩への探求」の中で「ドイツでの『ギーター』受容の第1段階」と「ドイツでの『マハーバーラタ』研究の誕生」⁹⁾の時代について述べている。ゲーテは同時代を生きていた。

以下の人物たちは、ドイツにおいて『ギーター』に関し、編集、翻訳、注解を書いた。ヨハン・ゴットフリート・ヘルダー(Johann Gottfried Herder, 1744-1803)、フリードリッヒ・マイエル(Friedrich Majer, 1772-1818)、フリードリヒ・シュレーゲル(Friedrich Schlegel, 1772-1829)、アウグスト・シュレーゲル(August Schlegel, 1767-1845)、ヴィルヘルム・フォン・フンボルト(Wilhelm von Humboldt, 1767-1835)である。

ドイツでの『マハーバーラタ』研究の誕生に携わる人物は、フリードリヒ・

シュレーゲル、言語学者であるフランツ・ボップ (Franz Bopp, 1791-1867)、東洋学者、インド学者であるクリスチャン・ラッセン (Christian Lassen, 1800-1876) などである。

ゲーテは以上の人物たちの著書などを読んでおり、また直接会って交流した人物もいる。

2. ゲーテと『ギーター』

ゲーテは、輪廻が基礎概念となるこの『ギーター』をドイツ語とラテン語で数回にわたり研究した (1792/1808/1815/1824/1826)。以下ゲーテがインド学やヒンズー教の研究をした時期をできるだけ年代順に紹介していく。

1792年出版の *Zerstreute Blätter* (『散らばった紙』) というヘルダーの作品に、ヘルダーは *Gedanken einiger Brahmanen* (『いくつかの婆羅門の思考』) という見出しで『ギーター』から3つの詩の詩句を改変し載せた。その詩はオリジナルではなく「替え歌」(Nachdichtungen) として載せているが、それにも関わらずこれが『ギーター』の一番早い独訳として数えられている¹⁰⁾。ヘルダーは『人類歴史哲学考』(*Ideen zur Philosophie der Geschichte der Menschheit*, 1784-1791) の第3部第11巻の中でアジアの国々とそれらの民族の宗教を紹介して、その中で「釈迦の宗教」(仏教、教祖の積尊とその輪廻の教え) や「婆羅門の宗教」(ヒンズー教) などを取り上げている¹¹⁾。ゲーテはインド宗教と文学の専門家であったヘルダーの作品を読み、影響を受けたと考えられることから、ヘルダーは、ゲーテがバラモン教(ヒンズー教) を研究するきっかけの一つになったと考えられる。

ヘルダーの弟子であるフリードリヒ・マイエルは1802年にウィルキンズの英語版の『ギーター』をドイツ語に訳し、初めての独全訳を出版した¹²⁾。

1815年前半、ゲーテは *Asiatisches Magazin* (『アジアの雑誌』) を2冊、数か月間借りた。その中にフリードリヒ・マイエルの『ギーター』の第1章から第3章までの独訳があった¹³⁾。

思想家のフリードリヒ・シュレーゲルは1808年に『インド人の言語と英知について』(*Über die Sprache und Weisheit der Indier*) を出版した。この作品はドイツに

おけるインド研究に貢献した。ゲーテは『インド人の言語と英知について』を読んだ際、その中で『ギーター』の部分的な独訳を見つけた¹⁴⁾。

フリードリヒ・シュレーゲルの兄弟で、翻訳家、詩人のアウグスト・シュレーゲルはサンスクリット語からの『ギーター』(1823)の全訳を成し遂げた。この全訳はドイツ語ではなくラテン語であり、ドイツにおける『ギーター』研究の広がりにも貢献した。

1824年11月1日ゲーテはアウグスト・シュレーゲルからこの『ギーター』のラテン語訳をもらった。以前ゲーテは、知人のミヒャエル・ベア (Michael Beer, 1800-1833) に、シュレーゲルのインド関係の著作を知りたいという希望をもらっていた。その後、シュレーゲルはベアを通じて、注釈とラテン語訳付きの『ギーター』(1823)を送った。ゲーテは1824年12月15日のアウグスト・シュレーゲル宛の手紙の中で「遠慮しながら申しあげた希望をさっそくかなえてくださり、昔から変わらぬご芳情ありがたく御礼申し上げます¹⁵⁾」という言葉で礼¹⁶⁾を述べている。ここから、ゲーテの感謝の念だけではなく、彼の『ギーター』への探究心を読み取ることができる。

同じ手紙の中で、ゲーテはシュレーゲルのインド研究について「インド文学についてのご研鑽にも、遠くからではありますが、深い関心をよせてまいりました。御著においても、批判と手法が、全体を生かす精神に進んで手をかしている様子がうかがわれ、大慶に存じます。(省略) 文芸については、私は早くからの最も誠実な崇拜者の一人だと言ってよいと思います¹⁷⁾」と述べている。ただしインド文学に深い興味を示したゲーテだが、後ほど論じるように、インド宗教に対しては批判的であった。

言語学者のヴィルヘルム・フォン・フンボルトは『ギーター』を研究し、『ギーター』に対して大きな熱意をもっている人物であった¹⁸⁾。ゲーテはフンボルトの『ギーター』についての2回の講義の複写を持っていた。*Ueber die unter dem Namen Bhagavad-Gita bekannte Episode des Maha-Bharata* (『ギーター』という名で知られている『マハーバーラタ』の物語について) というタイトルの講義は、1825年6月30日と1826年6月15日にベルリン・アカデミーで行われたもの

である¹⁹⁾。

ゲーテは1826年10月22日のフンボルト宛の手紙の中で、9月30日にフンボルトからもらった1826年の講義の複写に対する礼を述べて、講義について次のように述べている。

私はインドのことに無関心ではありませんが恐れています。なぜならインドは、私の想像力を無形のものに変えてしまうからです。しかし、もしインドのことを親愛なる友人の名の下に友人が私に紹介するならば、それはいつでも歓迎されるでしょう。そのことは、その友人にとって興味のあるもの、そして彼にとって確かに重要であるものについての対話をする望ましいきっかけを、私に与えてくれるからです。²⁰⁾

ゲーテは1826年10月10日、秘書であるフリードリヒ・ヴィルヘルム・リーマー (Friedrich Wilhelm Riemer, 1774-1845) とフンボルトの講義について会話をした²¹⁾。そして1826年12月27日の日記に、ゲーテはフンボルトとインド哲学と詩学について会話をしたことを記した²²⁾。

以上のように、ヘルダー、アウグスト・シュレーゲル、フンボルトなどの東洋研究者との長年の交流によって、ゲーテはインドについての自身の知見を深めることができたと考えられる。

3. ゲーテと『マハーバーラタ』、『ラーマーヤナ』、『ヴェーダ』

ゲーテが読んでいたヒンズー教の文献は、ほとんど『マハーバーラタ』からのものであるが、彼は『ラーマーヤナ』も知っていた。加えてゲーテはヒンズー教とインド社会についての知識をオランダの歴史学者オルフェルト・ダッペル (Olfert Dapper, 1636-1689) の『アジア』(Asia, 1681)²³⁾とフランスの探検家ピエール・ソネラ (Pierre Sonnerat, 1748-1814) の『1774年より81年にわたる東インドおよびシナへの旅』(Reise nach Ostindien und China auf Befehl des Königs unternommen vom Jahr 1774 bis 1781, 1783 以下『旅』と略する)からも得ていた²⁴⁾。

ゲーテの時代のインド研究の状況では、どの文献がどの叙事詩に属しているか、はっきりしない場合があった。例えば、ゲーテは1811年2月27日にロシアの古典学者であり政治家でもあるセルゲイ・セミョーノヴィチ・ウヴァーロフ (Sergey Semionovich Uvarov, 1786-1855)宛の手紙の中で次のように述べている。

同梱されていたパネルから、私はあなたがどんなものに興味があるかを知り、それは私が長い間無駄に研究してきたもの、私の望みを無駄にしてきたものに向けられていることを自然に知りました。ならば私が、例えばインド文学の一部にしか触れられなかったとしても、結局のところ、『ヴェーダ』に対する以前の愛は、ソネラの貢献やジョーンズの熱心な努力や『シャクンタラー姫』と『ギータ・ゴーヴィンダ』の翻訳によって育まれました。そしていくつかの伝説は、私にそれらを翻案し解釈し新たな作品を生み出させるような魅力を感じさせました。以前ヴェーダの詩的な翻案を企てましたが、講評する者の立場からは、到底受け入れることができないと思いやめました。しかしもし完成させていたら少なくともこの重要で優雅な伝説の鑑賞を、人々に伝え、活かすことができただでしょう。²⁵⁾

ここで述べられている『ヴェーダ』は、インドの最も古い時代の文学から編纂された一連の宗教文書である。手紙を書いた当時、『ヴェーダ』の翻訳がまだ進んでいない状況だったが、ゲーテはヴェーダという言葉や、ダッペルの『アジア』から知った可能性が高いといわれている。その中には『ヴェーダ』(der Vedam)についての記述があり、インドの神話学の物語がいくつか紹介されている²⁶⁾。しかし、現在のヒンズー教の体系では、『シャクンタラー姫』は『ヴェーダ』からではなく、『マハーバーラタ』からの物語であり、『ギータ・ゴーヴィンダ』はヒンズー教の聖典の一つである。

ジョーンズは『シャクンタラー姫』(Sakuntala, 1789)と『ギータ・ゴーヴィンダ』(Gitagovinda, 1799)を英訳し、それに基づいてゲオルク・フォルスター (Georg Forster, 1754-1794)は『シャクンタラー姫』(Sakuntala, 1791)の独訳、フリッ

ツ・ダールベルク (Fritz Dahlberg) は『ギター・ゴヴィンダ』(Gitagovinda, 1802)の独訳を作った。ゲーテは両作品の独訳と英訳とを比較し、特に『ギター・ゴヴィンダ』の独訳と英訳の大きな差に気づき、より精度の高い独訳を望んだ。また彼は特に『シャクンタラー姫』を好んだ²⁷⁾。

3. 1 ゲーテと『マハーバーラタ』

3. 1. 1 『シャクンタラー姫』と『ナラ王子物語』

ドイツでの『マハーバーラタ』研究の誕生に携わった人物はフリードリヒ・シュレーゲル、フランツ・ポップ、クリスチャン・ラッセン²⁸⁾、ゲオルク・フォルスターなどである。「穏和なクセーニエ」(Zahme Xenien II, 1820)²⁹⁾という一連の詩の中で、ゲーテは『マハーバーラタ』に出てくる人物を2人、次のように取り上げている。

東洋はそれらをとくに呑みこんでいた
カーリダーサをはじめとする古代インドの詩人たちが
あえて詩人の可憐によって
われわれを坊主や怪獣面からときはなってくれたのだ
もしインドに石彫り工さえいなかったなら
わたし自身そこに住みたいとおもう
あのように愉快なものがあろうか
シャクンタラー姫やナラ王子には接吻せずにおれぬ
また雲の使者メーガ=ドゥータを
いとしい人のもとへ遣ろうとねがわぬ者がいようか³⁰⁾

ゲーテがここで言及しているのは、『マハーバーラタ』の中の物語をもとにした劇『シャクンタラー姫』、『ナラ王子物語』、そしてヒマラヤの大自然の中での恋愛を歌った抒情詩『メーガ=ドゥータ』である。カーリダーサは4、5世紀頃のインドの詩人で、サンスクリット文学黄金時代の端初を築き³¹⁾、

『シャクンタラー姫』、『メーガ=ドゥータ』などを書いた。この詩では、ゲーテがカーリダーサとインド文学への尊敬の念を表して、このような偉大な詩人がインドに住んでいるならば、ゲーテ自身もインドに住みたいと述べている。

1791年5月17日フォルスターは自身が英語から訳した劇『シャクンタラー姫』(Sakontala, 1791)の独訳をゲーテに送って、同年9月5日英語の原本を送った。『シャクンタラー姫』はゲーテの『ファウスト』第1部の「舞台の前曲」の執筆に影響を与えた³²⁾。

フランツ・ポップは1819年に『ナラ王子物語』(*Nala*)のラテン語訳を出版し、1820年にヨーハン・ゴットフリート・ルートヴィヒ・コーセガルテン(Johann Gottfried Ludwig Kosegarten, 1792-1860)はその独訳(*Nala*)を出版した。

ゲーテは『シャクンタラー姫』と『ナラ王子物語』を劇として、文学として読んでいた。両方の劇は『マハーバーラタ』に基づいているので、ヒンズー教の思想が影響している。1837年、ラッセンの*Beiträge zur Kunde des indischen Alterthums aus dem Mahabharata*の第1部が『マハーバーラタ』の最初の体系的な研究³³⁾だが、ゲーテは1832年にすでに亡くなっていたゆえに、『マハーバーラタ』の体系を詳しく知ることはできなかった。

3. 1. 2 「神とバヤデレ」

ゲーテは「神とバヤデレ³⁴⁾ — インド伝説より」(*Der Gott und die Bajadere - Indische Legende*)という詩を1797年に出版した。彼は素材として、ソネラの『旅』のドイツ語版を主として使った³⁵⁾。『旅』第3巻第6章の中で、ソネラは翻訳家のアブラハム・ロジェル(S. Abraham Roger, 1609-1649)の言葉を引用した³⁶⁾。その言葉はインドの神であるDewendren(デヴェンドレン、インドラ Indraの別名)についてである。ソネラの著作には詳しく書かれてないが、このロジェルの言葉は、おそらく『マハーバーラタ』第9巻『シャルヤ・パルヴァ』(*Shalya Parva*)の第48章からとったものである。

『旅』の中の、ロジェルの言葉が引用されているこの部分は、ゲーテの詩の基となった。しかしゲーテは、デヴェンドラではなく、マハデエ(Mahadöh³⁷⁾)

という名前を使い、詩の冒頭で次のように述べている。「大地の主マハデエは / われらとひとしき人となって / 人間の苦楽をともにしようと / 六たび人界にくだった」³⁸⁾と。「マハデエ」とは、インドの3人の最高神（ブラフマー、ヴィシヌ、シヴァ）の一人シヴァの別名であり、ゲーテはこのことをソネラの作品から知った³⁹⁾。

ゲーテがこの詩のタイトルでドイツ語の定冠詞 Der (英語の the) と Gott 「神」を使っているゆえに、読者はこのインドの伝説を一神教の伝説であると感じることになる。「大地の主」という言葉は、神の全知全能を感じさせる。当時のヒンズー教の神話学に詳しくない人々がこの「インド伝説」の詩を読んだ場合、「マハデエ」はインドの唯一の神だと思った可能性がある。

3. 1. 3 『アルジュナ、インドラの世界へ行く』

ゲーテは『マハーバーラタ』の他の物語も知っていた。それは、フランツ・ポップがサンスクリット語から独訳して、1824年に出版した『アルジュナ、インドラの世界へ行く』(*Ardschuna's Reise zu Indra's Himmel, nebst anderen Episoden des Maha-Bharata*) をゲーテが持っていたからである⁴⁰⁾。タイトルを日本語に直訳すると『アルジュナのインドラの天界への旅、と他のマハーバーラタの物語』となる。この挿話は『マハーバーラタ』第3巻の中の第43章から第79章にあたる。

3. 2 ゲーテと『ラーマーヤナ』

アウグスト・シュレーゲルが『ラーマーヤナ』の翻訳を知っていたゲーテは、すでに1824年12月15日の手紙の中で、この大事業の成功を祈り、シュレーゲルが将来、出版する本の一冊をワイマール図書館のために頂きたいと申し出た⁴¹⁾。アウグスト・シュレーゲルはラッセンと共にワイマールを訪問した際に、ゲーテにインドの神々の像の描かれた細長い絵巻物や、偉大なインドの詩2編（『ラーマーヤナ』と『ヒトーパデーシャ』）が書かれたサンスクリット語の原典を見せた⁴²⁾。ゲーテはこの出来事を1827年4月24日の日記に記した⁴³⁾。

4月24、25日のシュレーゲルとラッセンの訪問の際に、ゲーテは2人とインド文学などについて対話をした。

アウグスト・シュレーゲルの注解付きの『ラーマーヤナ』のラテン語訳は1829年から1846年の間、第1巻から第4巻で出版された。『ヒトローパデーシャ』(Hitopadesa)の訳文はシュレーゲルによって1829年と1831年に出版された。ゲーテは1832年に亡くなったゆえに、アウグスト・シュレーゲルの『ラーマーヤナ』の全訳を読むことはできなかった。

しかし、ゲーテは実はすでに若いころから『ラーマーヤナ』の内容を「インドの寓話」⁴⁴⁾としてダッペルの『アジア』を通して知っていた。ただ、当時彼はこの「インドの寓話」が『ラーマーヤナ』からであるとは知らなかった。1774年11月の夜、知人宅の集まりでゲーテは、ある女性とインドの物語について会話をした。このことを芳名録に「ラーマ王子、シータ姫、ハヌマーンとその尻尾」と記している⁴⁵⁾。このようにゲーテは、若いころからすでにインドの物語に魅力を感じていたと考えられる。

1808年7月23日の日記で、ゲーテは日中にシュレーゲルの『インド人の言語と英知について』の中の『ラーマーヤナ』の翻訳を読んで、『ヴェエダ』についての回想をしたと書いている⁴⁶⁾。ゲーテはあの「インドの寓話」と『インド人の言語と英知について』⁴⁷⁾の中で再会したと思われる。すでに30年以上が経っていたが、翻訳文と物語の内容が非常に似ていたゆえに、ダッペルの『アジア』で読んだ、あの「インドの寓話」のことを思い出したであろう。

4. ゲーテのインドの神話学・多神教についての考察

ゲーテのインド神話学とその絵や偶像についての考えは、彼の東洋観の一面を示すものとして興味深い。「穏和なクセーニエ」(1820)の中で、彼はインドの神々について次のように述べている。

神々の聖堂に怪獣像をかざるなど
わたしはごめんこうむりたい！

不快きわまる象鼻
 とぐるを巻いてうごめく大蛇
 世界の沼にひそむ古亀
 ひとつの胴体についたおびたしい王侯の頭——
 もしこれらを生粋の東洋が呑みこんでくれなければ
 われわれは絶望の淵へ追いつめられるにちがない⁴⁸⁾

上記の一連の詩では、ゲーテがインドの石窟寺院にみられるさまざまな奇怪な彫像に対する抵抗感を述べている。彼にとって、これらのものは、「神々の聖堂」つまりローマにあるパンテオンには絶対に出現してもらっては困る、「生粋の東洋」にとどまってもらわねばならぬ、ものである⁴⁹⁾。ゲーテはインドの神話学を主にダッペルの『アジア』とソネラの絵付きの『旅』から知った。「穏和なクセーニエ」の中で、ゲーテはインドの神々について「わたしにしても正直なところ/インドの偶像はおぞましい(省略)わたしはそれらを永久に追放した——/まずはインドの多頭神/ヴィシヌ カーマ ブラフマー ジヴァの神々/さては祠にまつられたハヌマーン尾長猿も——」⁵⁰⁾と述べている。ハヌマーンが出る物語は、文学としては好きであったゲーテだが、宗教の観点から判断し、ハヌマーンを永久に追放することになった。

なぜゲーテはインドの神々の形相に抵抗感を抱いたのか、1824年12月15日のアウグスト・シュレーゲル宛の手紙の中で次のように説明している。「インド芸術も、彫塑に関する限り、私はどうも好きになれません。それは、想像力を集中させ規制するのではなく、散漫にさせ混乱させるからです」⁵¹⁾と。このことから、ゲーテは美的な観点から、インドの神々の偶像は神の姿にふさわしくないと判断した。インド芸術に違和感があったゲーテだが、同じ手紙の中で「あらゆる矛盾の調停点を見出すために、ボンの名品のなかにあなたが集められた貴重な絵画もぜひ拝見いたしたく、あなたのご指導によって、あのじつに喜ばしくも特徴的な世界で、あらゆる高尚深遠なもの、あらゆる外的なもの、内的なものとの完全な一体感がえられればと思っております」⁵²⁾と述べてお

り、友人の指導によってインド芸術についての知識と理解をさらに深めようとしていたことがうかがえる。アウグスト・シュレーゲルはインドの芸術博物館を開くためにインド関連の様々な品を集めていた⁵³⁾。そして1827年、彼がワイマルを訪問した際にゲーテに会い、インドの神々が描かれている絵巻を見せた⁵⁴⁾。

ヒンズー教は、一神教のキリスト教と異なって、多神教である。ゲーテ自身はキリスト教の世界で生まれ育ったが多神教を完全に否定していたわけではない。美的な観点から、彼はギリシャとローマ神話学の芸術に魅力を感じ、いくつか詩なども書いている。しかし、神々は崇高で聖なるものであるべきである、とするゲーテの美的センスからは、ヒンズー教の神々は全く受容できなかった。

『注解と論考』の「ガズナのマームード」の章の中で、ゲーテは自身の一神教と多神教についての考察をさらにはっきりと次のように述べている。

インドの教説はそもそものはじめから無益なものであり、事実、当今においても、その何千もの神々、といってもけっして従属関係にあるそれではなく、すべてが同様に絶対的な威力を持つ神々のことであるが、それらは人生の偶然性をかえっていっそうまどいのなかに置き、あらゆる情念の愚劣さをいっそうそそのかし、悪徳の錯乱を聖性と至福の最高段階とみなして助ける。

ギリシャ人やローマ人のそれのごとき、比較的純粋な多神教すらも、最後にはいつわりの道をゆき、その信奉者とおのれ自身とを失わざるを得なかった。それに反してキリスト教は最高の讚美を贈るにふさわしい。キリスト教の根源の純粋さ、高貴さは、つぎのことによって確認される。すなわちキリスト教は、暗愚な人物によってたとえどのような大きな迷誤に引きこまれようと、その最初の愛すべき特性に立ちかえり、布教団として、家族団・兄弟団として何度でも立ち現れ、人間の道徳的要求を活気づけるのだ。⁵⁵⁾

コーセガルテンは『注解と論考』を読んで、このゲーテのインドの教説につ

いての論に抗議する意味で1819年11月に評論を書いた。その評論を読んだゲーテは、1819年12月30日次のように返事した。

我々は良きインド人に対して偉大な恩があるゆえに、私の不快感から（インドの教説を）守るのはおそらく正解です。もちろん、内面的な偉大な精神の性質についての話の時に、ギリシャの外的な形態の規準を適用すべきではありません。できるだけ早く、良い運によって導かれて私をこれら（内面的な偉大な精神の性質）の領域に戻させます。そのためにあなたの確かな助言を気軽に求めようと思います。⁵⁶⁾

このようにゲーテは、コーセガルテンの批判を上手に交わり、一方でコーセガルテンとの交流によって、自身のインドの教説についての見方を変える覚悟を示した。

ゲーテのヒンズー教についての考えを次の章でさらに論じていく。

5. ゲーテのインドのカースト制度についての考察

インドの神話学・多神教の他に、ゲーテはヒンズー教社会のカースト制度について集中的に考察した。『注解と論考』の「近世および最近の旅行家たち」の章で、彼はインドの詩文学や宗教やカースト制度について次のように述べている。

かくしてオリエントを愛する若者たちには、門戸がつぎつぎに開かれてあの太古の世界の秘密、奇妙な憲法やふしあわせな宗教のもつさまざまな欠陥とならんで、詩文学のすばらしさを知るようになる。カースト制度の争いや幻想的な宗教的怪物や難解深遠な神秘主義はさておき、その詩文学には、純粹な人間性や高貴な習俗や快活さや愛が避難しており、究局的（究極的・筆者註）にはやはりそのなかに人類の救いが保たれていることを確信させるのである。⁵⁷⁾

ゲーテの『注解と論考』は、1818年から1819年に執筆された。ゲーテはカー

スト制度について、他の作品でも述べている。ダッペルの『アジア』とソネラの『旅』からの影響により、ゲーテは「神とバヤデレーインド伝説より」(1797)と「パーリア」(Paria, 1824)を執筆した。特に「パーリア」はカースト制度が重要なテーマの一つである。パーリアとは、主にドイツ言語地域で使われている言葉で、カースト制度の外側にあつて、インドのヒンズー教社会において差別されてきた人々のことであり、不可触民と呼ばれている人たちのことである。ヨーロッパでは、1821年フランスのドラヴィーニュ(Casimir Delavigne, 1793-1843)の悲劇『ル・パーリア』(*Le Paria*)、1823年ドイツのミハエル・ベアア的一幕劇『パーリア』(*Der Paria*)が出版された。これらにゲーテは影響を受けたようである⁵⁸⁾。彼はすでに1770年代からダッペルの『アジア』を通してパーリアについて知っていた。40年以上経った1820年代、彼はこのテーマについて再研究を始め、初めて知ってから1824年に詩「パーリア」を公表するまで長い期間があいた。詩「パーリア」の基となったのは、ダッペルの『アジア』のパーリアについての部分からではなく、ソネラの『旅』のそれからである⁵⁹⁾。

ダッペルとソネラから以外に、ゲーテはヘルダーの『人類歴史哲学考』第3部第11巻の「インドスタン」の章から、カースト制度やパーリアなどについて知見を得たと考えられる⁶⁰⁾。

詩「パーリア」は三部作であり、「パーリアの祈り」(Des Paria Gebet)、「聖譚」(Legende)、「パーリアの感謝」(Dank des Paria)という詩からなる。「パーリア」は「神とバヤデレーインド伝説より」と同じく神への呼びかけから始まるが、今回はマハデエではなく、梵天(ブラフマー)への次のような呼びかけから始まる。「偉大なる梵天 全能の主よ/あなたはすべての生命のみなもと/まことに公明正大なお方のはずです」⁶¹⁾インドの3人の最高神(梵天=ブラフマー、ヴィシュヌ、シヴァ)の一人である梵天は、インドの信仰によれば、すべての生命を生み、これを維持する無限の力を有する⁶²⁾。詩の続きは「あなたはまこと パラモンのみを/王侯や金持ばかりを ひとえに/おつくりになったのでありましようか? /いえ 猿やわたしども賤民パーリアを/生みだされた方でもあら

れましょう？」⁶³⁾である。この問いでは、カースト制度の3階級「バラモン」、
「王侯(クシャトリヤ)」、「金持(ヴァイシャ)」のみを取り上げているが、実際の
カースト制度は4階級であり、4つ目の階級であるシュードラが取り上げられ
ていない。そして詩の続きでは、パーリアが、詩「神とバヤデレーンド伝
説より」に出てくるバヤデレ(遊女)と同じように、自分も神化したいと祈っ
ている。ただしバヤデレは来世ではなく、今世において神化したが、「新生の
恵みを与えて下さいました」⁶⁴⁾という句は、来世のことを意味していると考え
られる。

『パーリア』の最後に「偉大な梵天よ いまこそ知ります(省略)あなたはす
べてをうべなわれます/あなたは しもじもの者に対しても/耳をふさぐよう
なことはなさいません/新生の恵みを与えて下さいました」⁶⁵⁾とあるが、この
ように、ゲーテは詩の中で、パーリアの梵天への祈りを表現し、パーリアの救
いを描いた。

この「救い」という概念は非常にキリスト教的である。そしてパーリアから
抜け出しそれより高い階級に生まれ変わるという考えはヒンズー教的である。

「新生の恵みを与えて下さいました」はドイツ語でAlle hast du neu geboren⁶⁶⁾
であるが、ここでは「蘇らせてくれた」や「生まれ変わらせてくれた」などの
和訳も考えられる。つまり、ゲーテはここではヒンズー教が教える輪廻の概念
を自分流で用いている。なぜなら、ゲーテの詩によると、パーリアは梵天、す
なわち、神の力によって生まれ変わった。この意味において、ゲーテの描く
「生まれ変わる」は、ヒンズー教の説く輪廻観とは異なる。

6. 最晩年のゲーテのヒンズー教についての考察

エッカーマンは、1829年2月17日のゲーテとの対話の中で、インドの哲学、
つまりヒンズー教について次のように述べている。

(フランスの哲学者)クザンの話から、われわれはインド哲学のことに(話が)
移った。「この哲学は、」とゲーテはいった、「イギリス人の報告が真実だとする

と、別段変わったところがあるわけではないね。その中にはむしろわれわれ自身
がみんな一度は通る時代がくり返されているにすぎないのだ。われわれは、子供
のころは、感覚論者だ。恋をして、恋人に、現実には存在しない性質を見るよう
になると、理想主義者になる。この恋もぐらつきだして、誠実さというものを疑
うようになると、いつのまにやら懐疑主義者になる。そうなると、あの人生はど
うでもよくなる。われわれは、なるがままに任せるようになり、ついにはインド
の哲学者たちみたいに、静寂主義になるというわけさ。⁶⁷⁾

ゲーテは上記の「イギリス人の報告」について考察している。「イギリス人
の報告」とはヘンリー・トマス・コールブルックの論文『ヒンズー教徒の哲
学について』(On the Philosophy of the Hindoos, 1823-27)のことを指している。ここで
ゲーテは、彼が考える人生の段階としての感覚論、理想主義、懐疑主義、最終
の段階としての静寂主義を取り上げている。彼によると、「われわれ」すなわ
ちドイツ人(西洋人)は最終的にインドの哲学者(東洋人)と同じように静寂
主義という段階にたどり着くことになる。最晩年のゲーテのヒンズー教につ
いての考えは、過去の考えと異なっている。ゲーテは、コールブルックの論文の
研究を通して自身のインド哲学についての考察を一層深めることができたとい
える。

『ギーター』の和訳家である上村勝彦は『マハーバーラタ』と『ギーター』
の哲学的意義について次のように説明している。

『マハーバーラタ』は人間存在の空しさを説いた作品である。後代の詩論家は、
寂靜の情調(シャント・ラサ)がこの叙事詩の主題であるとする。しかし、作中
人物たちは、自らに課せられた苛酷な運命に耐え、激しい情熱と強い意志をも
って、自己の義務を遂行する。この世に生まれたからには、定められた行為に専心
する。これこそ『ギーター』の教えるところでもある。⁶⁸⁾

上村勝彦が述べたように、寂靜の情調が『マハーバーラタ』の主題とされ

たが、『ギター』の真髓は「定められた行為に専心する」ことであると。これは興味深いところである。なぜなら、ゲーテがファウストで「太初（はじめ）に行（ぎょう）ありき」^{69）}と表現しているように、彼もまたある「行為の哲学」をもっていたからである。

おわりに

ゲーテが生きた時代のドイツは、『マハーバーラタ』と『ギター』などの研究が始まったばかりであった。そのため、インドの文献の翻訳や解釈や体系がまだ充実していなかったが、彼はこの新しく誕生したインド学の発展を、好奇心をもって観察し、新たな知識を手に入れようとしていた。そして興味をもったインドの物語を、自身の詩「神とバヤデレ」、「パーリア」、「穏和なクセーニエ」などに活かした。

ゲーテが読んだ文献は『マハーバーラタ』からの『ギター』や『アルジュナ、インドラの世界へ行く』、そして『マハーバーラタ』に基づいた劇『シャクンタラー姫』や『ナラ王子物語』などである。そして『ラーマヤナ』や『ギータ・ゴヴインダ』や『メーガ＝ドゥータ』なども読んだ。また彼はダッペルの『アジア』とソネラの『旅』とヘルダーの『人類歴史哲学考』からヒンズー教とその社会について知見を得た。そしてカースト制度とインドの神話学の神々については、受け入れられなかった。

ゲーテのインド宗教の理解はキリスト教の背景に基づいている。彼は東洋と西洋を結びつけようとしたが、『注解と論考』の中で、一神教は多神教より優れているとも述べている。インドの神話学についての考えは、終生変わらなかったであろうが、ヒンズー教についての晩年のゲーテの考えは、研究を通しより深まったであろう。彼の晩年の考察によると、西洋人（ドイツ人）も東洋人（インド人）も最終段階で静寂主義にたどり着く。

当時の手紙から、アウグスト・シュレーゲルの『ギター』についての講義を読んで、これについて秘書リーマーと会話したことがわかる。また『ギター』に関してのゲーテの発言から、彼がこのテーマに関して興味をもってい

たことがわかる。よってゲーテは『ギター』を読んでいたと考えられるが、『ギター』について彼のはっきりとした研究の跡、例えば研究ノートなどは残っていない。彼は『ギター』の思想を自身の文学作品に活かした可能性もあるが、それには彼の晩年の作品を『ギター』の思想と比較する必要がある。『ギター』の重要なテーマは、輪廻、行為、魂の不滅さなどである。このテーマは彼の人生観と似ているところがあると考えられる。詩「パーリア」の「新生の恵みを与えて下さいました」は、ゲーテのもつヒンズー教の輪廻観を示している。

今後の研究課題は、ゲーテのもつ個人的な輪廻観とヒンズー教における輪廻観を比較して、本来のヒンズー教の輪廻観が、彼の他の作品にも表れているかどうか、そして『ギター』の行為の概念が、ゲーテのもっていた行為の概念と関連しているかどうか、である。

注

- 1) Lauer, Gerhard (2012)
- 2) Mecklenburg, Norbert (2003)
- 3) 下中弘 (1971)、101頁.
- 4) 上村勝彦訳 (1992)、表紙.
- 5) Pattanaik, Devdutt (2015: 24-26)
- 6) 同上、25-26頁.
- 7) 『ゲーテ全集15』、373頁.
- 8) 同上、372-373頁.
- 9) Adluri & Bagchee (2014: 30-48)
- 10) 同上、31頁.
- 11) *Herder Werke* Bd. 6 (1989: 455)
- 12) Adluri & Bagchee (2014: 31)
- 13) Keudell [Anm. 3], Nr. 956.
- 14) FA II, 6, 300, 307, 315, 321f., 326f.
- 15) An der freundlichen baldigen Erfüllung meines bescheidenen geäußerten Wunsches, dürft ich wohl ein fortgesetztes früheres Wohlwollen dankbar gewahrt werden. (FA II, 10, 225-226. 筆者訳)
- 16) 『ゲーテ全集15』、419頁とFA II, 10, 836.

- 17) 『ゲーテ全集15』、224頁.
- 18) Adluri & Bagchee (2014: 33-34)
- 19) Ruppert [Anm. 12], Nr. 1784.
- 20) Nun aber muß ich versichern, daß mir und Riemern das übersendete Programm recht zu Gunsten gekommen und über Sprache und Philosophie zu verhandeln gar löblichen Anlaß gegeben. Abgeneigt bin ich dem Indischen keineswegs, aber ich fürchte mich davor, denn es zieht meine Einbildungskraft in's Formlose und Difforme, wovon ich mich mehr als jemals zu hüten habe; kommt es aber unter der Firma eines werten Freundes, so wird es immer willkommen sein, denn es gibt mir die erwünschte Gelegenheit mich mit ihm zu unterhalten von dem, was ihn interessiert und gewiß von Bedeutung sein muß. (FA II, 10, 421-422. 筆者訳)
- 21) FA II, 10, 1000.
- 22) 同上、436頁.
- 23) 参考 Däbritz, Walter (1958: 99-117)
- 24) 『ゲーテ全集1』、402頁.
- 25) Aus den beigefügten Tafeln mußte ich natürlicher Weise ersehen, daß Ihre Absichten auf Gegenstände gerichtet sind, denen ich schon längst vergebens meine Wünsche zuwende: denn ob ich gleich z.E. in das Gebiet der indischen Literatur nur Streifzüge machen konnte; so ward doch eine frühere Liebe zu den Vedas durch die Beiträge eines Sonnerats, durch die eifrigen Bemühungen eines Jones, durch die Übersetzungen der Sacontala und Gita-Govinda immer aufs neue genährt, und einige Legenden reizten mich, sie zu bearbeiten; wie ich denn schon früher eine poetische Behandlung der Vedas in Gedanken hegte, die, ob sie gleich von Seiten der Kritik wenig Wert gehabt hätte, wenigstens dazu hätte dienen können, die Anschauung dieser bedeutenden und anmutigen Überlieferungen bei mehreren zu beleben (FA, II, 6, 641-642. 筆者訳)
- 26) FA II, 6, 1116.
- 27) 同上、1117頁.
- 28) Adluri & Bagchee (2014: 40-41)
- 29) FA I, 2, 1166.
- 30) 『ゲーテ全集1』、359頁.
- 31) 同上、451頁.
- 32) Schmidt, Jochen (2001: 50)
- 33) Adluri & Bagchee (2014: 40)
- 34) 『ゲーテ全集1』では詩のタイトルに「娼婦」という単語が使われているが、「バヤデレ」という単語の方が原意に近いと、筆者が言葉を入れ替えた。
- 35) 『ゲーテ全集1』、402頁.
- 36) Sonnerat, Pierre (1783: 211)

- 37) FA I, 1, 692.
- 38) 『ゲーテ全集 1』、108頁.
- 39) FA I, 1, 1240.
- 40) WA III, 9, 260f.
- 41) FA II, 10, 225-226.
- 42) エッカーマン、140頁.
- 43) FA II, 10, 471.
- 44) 『ゲーテ全集10』、92頁.
- 45) "Ram Sitha Hannemann und sein Schwanz," (FA I, 1, 185-187. 筆者訳)
- 46) FA II, 6, 330.
- 47) Schlegel, Friedrich (1808: 231-271)
- 48) 『ゲーテ全集 1』、359頁.
- 49) FA I, 2, 1175.
- 50) 『ゲーテ全集 1』、361頁.
- 51) 『ゲーテ全集15』、224頁.
- 52) 同上、224頁.
- 53) FA II, 10, 837.
- 54) 同上、471頁.
- 55) 『ゲーテ全集15』、297頁.
- 56) Den guten Indiern sind wir so viel schuldig, daß es wohl billig war sie gegen meinen Unmuth in Schutz zu nehmen. Den Maaßstab griechischer äußerer Wohlgestalt darf man freylich da nicht anlegen, wo von innern großen Geisteseigenheiten die Rede ist. Möge mich bald ein gutes Geschick in diese Reiche zurückführen, da ich mir denn Ihr sicheres Geleit alsobald zu erbitten die Freyheit nehmen werde. (FA I, 3/2, 1445. 筆者訳)
- 57) 『ゲーテ全集15』、373頁。
- 58) 『ゲーテ全集 1』、433頁.
- 59) FA I, 2, 1045.
- 60) *Herder Werke* Bd. 6 (1989: 455-456)
- 61) 『ゲーテ全集 1』、297頁.
- 62) 同上、433頁.
- 63) 同上、297頁.
- 64) 『ゲーテ全集 1』、297頁.
- 65) 『ゲーテ全集 1』、297頁.
- 66) FA I, 2, 455.
- 67) エッカーマン著 (1968) 67-68頁.
- 68) 上村勝彦訳 (1992)、16頁.
- 69) 『ゲーテ全集 3』、42頁.

参考文献

[1 ゲーテ自身の著作]

(ドイツ語：全集)

Goethe, Johann Wolfgang: *Sämtliche Werke. Briefe, Tagebücher und Gespräche*. 40 in 45 Bänden in 2 Abteilungen, Deutscher Klassiker Verlag, Frankfurt am Main, 1993-1999.

- Bd. 1: *Gedichte. 1756-1799*. Hrsg. von Karl Eibl, 1987. (略号：FA I, 1)

- Bd. 2: *Gedichte. 1800-1832*. Hrsg. von Karl Eibl, 1988. (略号：FA I, 2)

- Bd.3/2: *West-östlicher Divan. Kommentar II*. Hrsg. von Hendrik Birus, 1994. (略号：FA I, 3/2)

- Bd. 3: *Briefe, Tagebücher und Gespräche*. 1786-1794. Hrsg. von Karl Eibl, 1991. (略号：FA II, 3)

- Bd. 6 (33): *Briefe, Tagebücher und Gespräche*. 1805-1811. Hrsg. von Rose Unterberger, 1993. (略号：FA II, 6)

- Bd. 10 (37): *Briefe, Tagebücher und Gespräche*. 1823-1828. Hrsg. von Horst Fleig, 1993. (略号：FA II, 10)

(ドイツ語：その他)

Goethe, Johann Wolfgang. *Werke*. Hrsg. im Auftrage der *Großherzogin Sophie von Sachsen*. Bd. 3. Weimar 1887-1919. (略号：WA III)

(日本語：全集)

ゲーテ：『ゲーテ全集』神品芳夫ほか訳 潮出版社 1979-1992 新装普及版2003.

——第1巻：「詩集」山口四郎訳 1979. (略号：『ゲーテ全集1』)

——第3巻：「ファウスト・ウルファウスト」山下肇訳 前田和美訳 1992. (略号：『ゲーテ全集3』)

——第10巻：「詩と真実」河原忠彦訳 山崎章甫訳 1980. (省略：『ゲーテ全集10』)

——第15巻：「書簡・西東詩集」小栗浩訳 生野幸吉訳 1981. (略号：『ゲーテ全集15』)

[2 ゲーテ以外の著作、研究書]

(ドイツ語、英語)

Adluri, Vishwa and Bagchee, Joydeep: *The Nay Science — A History of German Indology*, Oxford University Press, 2014.

Däbritz, Walter: Anregungen aus der indischen Mythologie in *Goethes Dichtung*, in: *Goethe. Viermonatsschrift der deutschen Goethe-Gesellschaft* N.F. 20, 1958.

Dapper, Olfert: *Asia, Oder: Ausführliche Beschreibung Des Reichs des Grossen Mogols Und eines grossen Theils Von Indien*. Froberg für Hoffmann, Nürnberg, 1681.

Forster, Georg: *Sakontala oder der entscheidende Ring, ein indisches Schauspiel von Kalidasa*. Mainz, 1791.

Frösche, Harmut: *Goethes Verhältnis zur Romantik*. Königshausen & Neumann, Würzburg,

2002.

- Herder, Johann Gottfried: *Werke. Ideen zur Philosophie der Geschichte der Menschheit*. Hrsg. von Martin Bollacher, Bd. 6, Deutscher Klassiker Verlag, Frankfurt am Main, 1989.
- Keudell, Elise von: *Goethe als Benutzer der Weimarer Bibliothek*. Weimar, 1931.
- Lassen, Christian: Beiträge zur Kunde des indischen Alterthums aus dem *Mahabharata* I: Allgemeines über das *Mahabharata*. *Zeitschrift für die Kunde des Morgenlandes* 1, 1837.
- Lauer, Gerhard: Goethes indische Kuriositäten. In: *Figurationen des Grotesten in Goethes Werken*. Hrsg. von Edith Anna Kunz et al. Aisthesis, Bielefeld, 2012.
- Mecklenburg, Norbert: Goethes ambivalentes Orientbild. In: *Neue Zürcher Zeitung*, 2003.
- Pattanaik, Devdutt: *my GITA*, Rupa Publications, New Delhi, 2015.
- Ruppert, Hans: *Goethes Bibliothek, Katalog*. Arion Verlag, Weimar, 1958.
- Schlegel, Friedrich: *Ueber die Sprache und Weisheit der Indier*. Mohr und Zimmer, Heidelberg, 1808.
- Schmidt, Jochen: *Goethes Faust Erster und Zweiter Teil, Grundlagen – Werk – Wirkung*. Verlag C. H. Beck, München, 2001.
- Sonnerat, Pierre: *Reise nach Ostindien und China auf Befehl des Königs unternommen vom Jahr 1774 bis 1781*. Orell, Geßner, Füllli und Kompagnie, Zürich 1783.
- (日本語)
- エッカーマン: 『ゲーテとの対話 (中・下)』 山下肇訳 岩波書店 1969.
- 『哲学事典』 下中弘編 平凡社 1971.
- 上村勝彦訳: 『バガヴァッド・ギーター』 岩波文庫 1992.